

帝塚山大学50周年・附属博物館10周年記念特別展示

平成26年 4月26日[土]～5月31日[土]

瓦

中国・朝鮮、 そして日本へ



— 帝塚山大学附属博物館所蔵瓦50選 —

た、道 III

[左から]

獣面文軒丸瓦(中国・南朝)

黄釉龍文軒平瓦(中国・清)

複合花文軒丸瓦(朝鮮・統一新羅)

唐草文軒平瓦(朝鮮・統一新羅)

素弁蓮華文軒丸瓦(横井廃寺・7世紀前半)

複弁蓮華文軒丸瓦(川原寺・7世紀後半)



帝塚山大学
TEZUKAYAMA UNIVERSITY



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24

1 平瓦 (中国・西周)

5 「長生無極」銘軒丸瓦 (中国・漢)

9 黄釉龍文軒丸瓦 (中国・清)

13 蓮華文軒丸瓦 (朝鮮・新羅)

17 鬼面文軒平瓦 (朝鮮・高麗)

21 梵字文軒丸瓦 (朝鮮・朝鮮)

2 饕餮文半瓦当 (中国・戦国燕)

6 蓮華文軒丸瓦 (中国・南朝)

10 黄釉龍文軒平瓦 (中国・清)

14 複合花文軒丸瓦 (朝鮮・統一新羅)

18 鬼瓦 (朝鮮・高麗)

22 蓮華文軒丸瓦 (日本・飛鳥・平隆寺)

3 樹木双獸文半瓦当 (中国・戦国齊)

7 獸面文軒丸瓦 (中国・南朝)

11 蓮蕾文軒丸瓦 (朝鮮・高句麗)

15 唐草文軒平瓦 (朝鮮・統一新羅)

19 鬼目文軒丸瓦 (朝鮮・高麗)

23 蓮華文軒丸瓦 (日本・飛鳥・横井廃寺)

4 雲文軒丸瓦 (中国・漢)

8 蓮華文軒丸瓦 (中国・唐)

12 蓮華文軒丸瓦 (朝鮮・百濟)

16 蓮蕾文軒丸瓦 (朝鮮・高麗)

20 鬼目文軒平瓦 (朝鮮・高麗)

24 蓮華文軒丸瓦 (日本・飛鳥・豊浦寺)



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48

- 25 蓮華文軒丸瓦 (日本・飛鳥・山田寺) 26 蓮華文軒丸瓦 (日本・飛鳥・川原寺) 27 重弧文軒平瓦 (日本・飛鳥・西安寺) 28 蓮華文軒丸瓦 (日本・飛鳥・長林寺)
 29 唐草文軒平瓦 (日本・飛鳥・法隆寺) 30 蓮華文軒丸瓦 (日本・飛鳥・本薬師寺) 31 唐草文軒平瓦 (日本・奈良・本薬師寺) 32 蓮華文軒丸瓦 (日本・飛鳥・大官大寺)
 33 唐草文軒平瓦 (日本・飛鳥・大官大寺) 34 蓮華文軒丸瓦 (日本・飛鳥・藤原宮) 35 唐草文軒平瓦 (日本・飛鳥・藤原宮) 36 蓮華文軒丸瓦 (日本・奈良・平城宮)
 37 唐草文軒平瓦 (日本・奈良・平城宮) 38 蓮華文軒丸瓦 (日本・奈良・東大寺) 39 唐草文軒平瓦 (日本・奈良・不退寺) 40 「西寺」銘蓮華文軒丸瓦 (日本・平安・西寺)
 41 唐草文軒平瓦 (日本・平安) 42 蓮華文軒丸瓦 (日本・平安・尊勝寺) 43 巴文軒丸瓦 (日本・鎌倉・法起寺) 44 連珠文軒平瓦 (日本・鎌倉)
 45 「東大寺大仏殿」銘軒平瓦 (日本・鎌倉・東大寺) 46 巴文軒丸瓦 (日本・安土桃山) 47 桐文軒丸瓦 (日本・安土桃山) 48 桐文滴水瓦 (日本・安土桃山・浄土寺)

瓦屋根のある風景は日本の街並みに欠かせません。その瓦は、中国で三千年以上前につくられ、朝鮮半島を経て、日本にやってきました。ここでは展示品の解説を通して、東アジアの瓦の歴史を振り返りたいと思います。

中国

1 は中国三千年の瓦の歴史でも最初期にあたる西周の平瓦です。屋根に固定させるための突起がみられます。2 は戦国・燕の饗饗（とうてつ）文半瓦当です。饗饗は悪霊や災害から建物を守る意図で採用されたとされます。3 は戦国・齊の半瓦当で、樹木双獣文を表しています。4 は雲文軒丸瓦です。5 には「長生無極」という吉祥句が記されています。6 は南朝の蓮華文軒丸瓦です。南朝の瓦は素弁形式が一般的で、蓮弁の中央に凸線が入るのも特徴です。この時代には7のような獣面文もみられます。唐の瓦は、8のような複弁蓮華文を主体とします。珠文をめぐらすのも特徴です。明、清には動物文が主流となり、釉薬を施した瓦もみられます。9、10 は清の黄釉瓦で、どちらも龍を表した文様です。

朝鮮半島

朝鮮半島での瓦づくりは前漢・武帝が漢四郡を設置した時期に始まりました。その後、三国時代に高句麗、百済は4世紀代、新羅はやや遅れて5世紀代に瓦づくりを始めています。11 は高句麗の蓮蕾文軒丸瓦です。赤褐色の色調が特徴的です。12 は百済の蓮華文軒丸瓦です。花卉の先端を隆起させて立体感をつくりだしています。13 は新羅の蓮華文軒丸瓦です。蓮弁の凸線に中国南朝の影響がうかがえます。14 は統一新羅の軒丸瓦で、二重に蓮華文をめぐらせています。統一新羅には軒平瓦の使用も一般的になりました。15 は唐草文を表しています。高麗初期には16のような高句麗的な文様の瓦が作られました。17、18 は鬼面の意匠の瓦です。19、20 は中期以降に流行した鬼目文の軒丸瓦、軒平瓦です。後期には中国元の影響を受けて梵字文が流行しました。21 は中心に梵字を配し、周囲に蓮華文を表しています。

日本

日本の瓦づくりは、588年、日本最初の大規模建築である飛鳥寺の建立に際し、百済から瓦づくりの技術者が渡来し、始まりました。日本の初期の瓦は百済瓦と非常によく似ています(22・23)。7世紀前半の文様の基本形は蓮華文であり、蓮弁は素弁形を基本とします。ただ、620年頃には新羅の影響を受け、24のような蓮弁中央に凸線を加えた瓦も出現します。639年、舒明天皇発願の寺、百済大寺（吉備池廃寺）の造営を契機に新たな瓦の文様が誕生します。蓮弁は一枚の小さな子葉を重ねた単弁形になりました。同様の文様は641年建立の山田寺にも引き継がれ(25)、全国各地に普及しました。また、重弧（じゅうこ）文軒平瓦も同じ時期に創作されました(27)。

川原寺の瓦(26)は子葉を二枚並べた複弁形で、同寺建立の660年代以降、各地に普及しました。軒平瓦は前代と同じ重弧文がともないます。長林寺の瓦(28)は法隆寺の瓦を

モデルとしています。法隆寺の軒平瓦(29)は中心の飾りから唐草文を展開させています。680年に建立がはじまった本薬師寺の軒丸瓦(30)は川原寺と似ていますが、珠文を加えています。軒平瓦(31)は一方方向の唐草文で、周囲に珠文や鋸歯文を加えます。珠文は朝鮮半島・統一新羅の瓦の特徴であり、その影響が想定できます。32・33は大官大寺の瓦です。軒平瓦は中心の飾りから左右に唐草文を展開させています。694年に遷都した藤原宮は最初に瓦を使用した宮殿です。その文様(34・35)は本薬師寺を踏襲しています。

平城宮の瓦は藤原宮や大官大寺の意匠をもとに創作されました(36・37)。その後、平城宮の文様は奈良時代の瓦の基本形となります。東大寺の瓦は同寺の造営に際し創作されたものです(38・39)。その文様は、西寺の瓦にみられるように(40)、平安時代にまで受け継がれています(41)。42は1102年に堀川天皇によって建立された尊勝寺の瓦です。生産地は播磨とみられます。平安時代後期頃には、新しい軒丸瓦の文様として巴文が登場します。巴文の瓦は今も作られています。

43は鎌倉時代初期の巴文ですが、同じ頃の軒平瓦には珠文を重ねた連珠文もみられます(44)。45は東大寺の鎌倉復興期に製作された瓦であり、「東大寺大仏殿」の銘文が刻まれています。岡山県・万富瓦窯で焼かれたことがわかっています。46は安土桃山時代の巴文軒丸瓦です。43とは巴の頭の形や珠文の数が異なります。47は豊臣家の家紋の桐文に金箔を貼り付けた金箔瓦です。48のような滴水瓦も、この時代に朝鮮半島から流入します。49は江戸復興期の東大寺の瓦です。「東大寺大仏殿」の銘文が刻まれるのは、鎌倉時代と意匠を合わせたためでしょう。50は軒棧瓦です。棧瓦は丸瓦と平瓦を一体としたものです。棧瓦は1674年に西村半兵衛という人物が発明したとされますが、その発明はその後の日本における瓦葺き建物の普及に大きな役割を担ったといえます。

参考文献

森 郁夫 2001 『瓦』 ものと人間の文化史 100、法政大学出版局
森 郁夫・金誠亀 2008 『日韓の瓦』 帝塚山大学出版会
柳 昌宗 2009 『東アジアの瓦当文化』 美術文化、韓国



49



50

49 「東大寺大仏殿」銘軒丸瓦（日本・江戸・東大寺）

50 軒棧瓦（日本・江戸）